

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」 (翻訳②)

Aldous Huxley : *Crome Yellow* (translation②)

桑原 加代子
Kayoko KUWAHARA

第6章

バーベキュー・スミス氏は、土曜日の午後のお茶に間に合って到着した。彼は背の低い太った男で大きな頭をしていて首はほとんどないと言ってもよかった。中年に入った時、彼はこの首のない事に心を痛めていた。しかし、バルザックの『ルイ・ランバルト』を読んで世界の偉人達は皆同じ特徴を持っているという事を知って気が楽になった。偉大さは、頭と心臓がバランスよく働く事であり、首が短ければ短い程、頭と心臓の2つの器官は互いに近づくというのである。アルガリ羊みみたいに……これは説得力があった。

バーベキュー・スミス氏は、古いタイプのジャーナリストだった。たて髪のような髪を広いが低い額から後になでつけ、ライオンを思わせるその頭を見せびらかしていた。幾分墮落しているように見えた。若い時分は陽気にボヘミアンと呼んでいたが、今はもうそうは言わなかった。今の彼は人々の教師であり一種の予言者だった。慰めと霊の教育に関する本は12000部売れていた。

プリシラは丁重に彼を迎えた。今までクローム屋敷に来た事がなかったので、彼女は屋敷を案内して回った。バーベキュー・スミス氏は感心しきっていた。

「とても美しく古風だ」と言い続けている。太い気どった声だった。

プリシラは発売されたばかりの本を誉めていた。「よかったわ」と楽しそうに言った。

「慰めになったのでしたら嬉しいのですが」とバーベキュー・スミス氏は言っている。

「蓮の池のところ、本当に素晴らしかったわ。」

「お気に召すと思っていました。インスピレーションで感じたんです。」そう言って空を指さした。

二人は庭に入って行った。バーベキュー・スミス氏が正式に紹介された。

「ストーンさんも作家なのよ」とデニスを紹介しながらプリシラが言った。

「本当ですか」とバーベキュー・スミス氏は優しく微笑み堂々とした表情でデニスを見た。「どんなものをお書きですか？」

デニスは腹が立った。その上間の悪い事に赤くなるのが分かった。プリシラは調和の感

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

覚がないのだろうか。彼女はバーベキュー・スミス氏とデニスを同じ範疇に入れようとしている。二人とも物を書く、そしてペンとインクを使う。「たいしたものではありません」と答えて顔をそらした。

「ストーンさんは若手の詩人の一人なのよ」とアンの声がした。彼はアンを睨んだ。すると彼女は怒ったように笑い返してきた。

「それは素晴らしい」とバーベキュー・スミス氏は言い、元気づけるようにデニスの腕をつかんだ。「詩人は高貴な職業です。」

お茶が済むと、バーベキュー・スミス氏は夕食までにちょっと書き物をしなければいけないのでと言って席を立った。プリシラにはよく分かった。予言者は自室に引き上げた。

バーベキュー・スミス氏は8時10分に居間に降りて来た。機嫌がよかった。にやにやしながら階段を降り、大きな白い手をこすり合わせていた。居間では誰かが静かに、とりとめもなくピアノを弾いていた。誰だろうと思った。恐らく若い女性だろう。しかし違った。デニスしかいなかった。彼はバーベキュー・スミス氏が部屋に入って来た時、あわてて立ち上った。

「どうぞ続けて下さい」とバーベキュー・スミス氏は言った。「音楽は好きですから。」

「無理ですよ。雑音になるだけですから」とデニスは答えた。

沈黙があった。バーベキュー・スミス氏は暖炉に背を向けて立ち、去年の冬の火を思い出していた。内心の満足感を押さえる事が出来ず、まだにやにやしていた。とうとうデニスの方を振り向いた。

「物を書いているそうですね」と尋ねた。

「ええ少しだけ。」

「1時間にどのくらいの言葉が書けますか？」

「数えた事がないのでわかりません。」

「数えてみるべきですよ。大切な事ですよ。」

デニスは考えてみた。「調子のいい時には4時間で1200語ぐらいだと思います。でも、もう少したくさんの時もあるかもしれません。」

バーベキュー・スミス氏はうなずいた。「あなたにとっては1時間に300語がせいぜいですね。」部屋の真中の方に歩いて行きくると振り向いて、デニスの方を見た。「今夜、5時から7時半までの間に、私がどのくらい書いたと思いますか？」

「わかりませんよ。」

「いや、考えてみて下さい。5時から7時半の間です。2時間半です。」

「1200語ですか」とデニスは思い切って言ってみた。

「いいえ」とバーベキュー・スミス氏の大きな顔が嬉しそうに輝いた。「もう一度考えて下さい。」

「1500語。」

「違います。」

「降参です」とデニスは言った。バーベキュー・スミス氏が何語書こうが、彼には興味のない事だった。

「教えてあげましょう。3800語です。」

デニスは大きく目を見開いた。「一日でそんなに仕事をしなければいけないんですか。」

バーベキュー・スミス氏は、突然打ちとけた様子になった。デニスの坐っているひじ掛け椅子の横に椅子を持って来て坐り、穏やかに話し始めた。

「まあお聞きなさい」とデニスの袖に手を置いて言った。「あなたは物を書く事で生計を立てたいと思っている。まだ若くて経験も少ない。ちょっとアドバイスさせて下さい。」

この人は何をしようとしているのか、デニスは考えた。ジョン・オブ・ロンドン・ウィークリーの編集者を紹介してくれるのだろうか。それとも7ギニーで随筆の売れるところを教えてくれるつもりなのだろうか。バーベキュー・スミス氏は彼の腕を何回か叩いて話し続けた。

「物を書く秘訣は」とデニスの耳元に息を吹きかけながら言った——「物を書く秘訣はインスピレーションです。」

デニスはびっくりして彼を見た。

「インスピレーション」とバーベキュー・スミス氏は繰り返した。

「自然の、技巧を凝らさないという意味ですか？」

バーベキュー・スミス氏はうなずいた。

「ああ、それなら分かります」とデニスは言った。「でも、もしインスピレーションが湧かなければどうするんですか？」

「私が待っていたのはその質問です」とバーベキュー・スミス氏は言った。「あなたは、インスピレーションが湧かなければどうしたらいいのかと尋ねる。お答えしましょう。あなたはインスピレーションを持っているんです。誰でも持っています。問題はそれを役立てる事です。」

時計が8時を打った。誰も来る気配はなかった。クローム屋敷では皆、夜は遅い。バーベキュー・スミス氏は続けた。

「これは私の秘密なんですが」と彼は言った。「お教えしましょう。」（デニスは顔をしかめ、ぶつぶつ言った。）「私はあなたのような素晴らしい真面目な若者が、知的労働で精力と人生の一番大切な時間を浪費するのを見るのが辛いんです。そんなものはインスピレーションさえあれば不必要なのですから。私自身そうだったんです。だからどんなものか分かります。38才になるまであなたのような物書きでした。インスピレーションの湧かない物書きです。身を粉にして一生懸命書いていました。当時は1時間に650語以上は書

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

けませんでした。その上書いたものもあまり売れなかったんです。」彼は溜息をついた。

「我々芸術家は、」と彼は言った。「我々知性人は、イギリスではあまり評価されていません。」デニスは一バーベキュー・スミス氏の言う『我々』から自分を切り離す方法があるだろうかと思った。なかった。それにもう遅かった。バーベキュー・スミス氏は話を続けていた。

「38才の時はまだ無名で貧乏でした。がむしゃらに働いて疲労困憊し、その上働き過ぎでした。今50才で」と言葉をきって肥った手を左右に開き、誇らしそうに指を広げた。彼は自分を誇示していた。デニスはネスルのミルクの広告を思い出していた——月の下で二匹の猫が壁の上にいる。一匹は黒でやせている。もう一匹は白くつやつやして肥っている。インスピレーションの前後だ。

「インスピレーションは重要です」とバーベキュー・スミス氏は厳かに言った。「インスピレーションは天からそっと降って来る露のように突然やって来ました。」手を上げそれを膝にもって行って露が落ちてくる仕草をした。「ある夕方でした。処世術についての初めての本を書いていた。お読みになったかもしれませんが、多くの人達にとっての慰めでした——少なくともそうあって欲しいと思います。2章の途中で行き詰まってしまったのです。疲労と過労で1時間に100語しか書けず、それ以上は無理でした。鉛筆の端をかみ、目の前の電気を見つめていました。」そう言ってそのランプの位置を慎重に示した。「長い間、明るい光をじっと見ていた事がありますか？」とデニスの方を振り向いて尋ねた。なかった。「そんな風に自己催眠をかける事ができるのです」とバーベキュー・スミス氏は続けた。

広間から大きな鐘が鳴った。誰も現われる気配はなかった。デニスは空腹感を感じた。

「私にもできました」とバーベキュー・スミス氏は言った。「自己催眠をかけたのです。意識を失ったんです。」指をパチンと鳴らした。「気が付いた時は真夜中を過ぎていました。そして4000語を書いていたのです。4000語ですよ」と彼は『千』という時口を大きく開けた。「インスピレーションを得たのです。」

「不思議ですね」とデニスは言った。

「初めは恐ろしく異常だと思いました。無意識の内に文学作品を書くという事は、公平だとは思いませんでした。その上、つまらないものを書いたのではないかと思っていました。」

「つまらないものだったのですか？」とデニスは尋ねた。

「いいえ」とバーベキュー・スミス氏は困ったように答えた。「いいえ、素晴らしいものでした。普通にかくのと同じように、わずかの誤字、脱字があっただけでした。文体と思想は——本質的に立派なものでした。その後、定期的にインスピレーションが湧いてくるようになりました。こんな風にして処世術の本を書き上げたのです。大成功でした。そ

して、その後は何もかもこうやって書いてきました。」前かがみになり指でデニスを突っつけた。「これが私の秘密です」と彼は言った。こうすれば、あなたにも書けるのです。努力しないで、さらさらと上手に。」

「どうやって？」とデニスはこの『上手』という言葉にムットとした事を感じさせないように言った。

「インスピレーションを養い潜在意識と接触するのです。私の『無限への道』という本を読まれましたか？」

デニスは、バーベキュー・スミス氏の本の中で唯一読んでいないものだと告白せざるを得なかった。

「構いません、気にしないで下さい」とバーベキュー・スミス氏は言った。「潜在意識と無限との関係についての本なのです。潜在意識と接触すれば宇宙と接触できます。実はインスピレーションなのですが、分かりますか？」

「ええ、よく分かります。」デニスは言った。「でも宇宙は時には見当違いのメッセージを送る事はないのですか？」

「そんな事はありません」とバーベキュー・スミス氏は答えた。「運河にするのです。」

「ナイアガラ滝のようにですか」とデニスは言ってみた。バーベキュー・スミス氏の言葉は何かの引用のようだった——きっと自分の本からの引用に違いない。

「そうです。」彼は前かがみになって、まるで拍子をとっているように人差し指を動かした。「催眠状態に入る前に、インスピレーションが欲しい問題に精神を集中させます。例えば、処世術について書いていると考えて下さい。催眠状態前の10分間は、幼い弟と妹を養っている孤児の事と、その作品がうまく書ける事だけを考えます。そして苦しみから得る精神的な高揚と浄化、鉛の悪から黄金の善への錬金術上の変化といった崇高な哲学的真理に精神を集中させます。（また引用だなとデニスは思った。）「それから眠ってしまうのです。2～3時間して目が覚めるとインスピレーションによる仕事が終わっています。数千という慰めと精神的な高揚の言葉が目の前にあるのです。これをきれいにタイプして印刷屋に渡します。」

「とても簡単そうですね」とデニスは言った。

「ええ。人生において偉大で素晴らしく、神聖なものは全て非常に簡単なのです。」（また引用だ。）「格言を作る時には」とバーベキュー・スミス氏は続けた。「催眠状態の前に、手近かにある引用辞典かシェイクスピア辞典を見ます。そうやってポイントを決めるのです。インスピレーションは、絶え間なく入って来るのではなく金言の雫となって流れて来るのです。分かりますか？」

デニスはうなずいた。バーベキュー・スミス氏はポケットに手を入れノートを取り出した。「今日、ここに来る途中の汽車の中で少し書いてみたんですが」とページを繰りなが

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

ら言った。「ほんのわずかでしたが、汽車はよい仕事をするのにいいみたいですね。これです。」咳払いをして読み上げた。

「山道は険しいかもしれない。しかし頂上の空気は澄んでいる。そして頂からは景色が見える。」

「大切な事は全て心の中で起こる²⁾。」

デニス『無限』が同じ事を繰り返すは奇妙だ思った。

「見る事は信じる事なり。そうだ、しかし信じる事は見る事だ。もし神の存在を信じるなら悪の中にさえ神の姿が見える。」

バーベキュー・スミス氏は、ノートから顔を上げた。「この最後の一行は神秘的で美しいとは思いませんか？インスピレーションがなければ思いつく事はなかったと思います。」再び、ゆっくりと厳かな調子でその格言を読んだ。「無限から」と考え深そうに言い次に移った。

「ろうそくの炎は光を与えてくれる。しかし燃えつきてしまう。」

バーベキュー・スミス氏は困惑したように、額に皺を寄せた。「どういう意味か、分かりません」と言った。「非常に格言的です、大学教育に当てはめる事ができます——悟りを開く人もいるかもしれませんが、下層階級の人々には不満と革命を引き起こしてしまいます。そうです。格言的です。」彼は考え込んで、顎をなでた。鐘が再びやかましく鳴った。哀願しているようだった。夕食は冷たくなってしまふ。その音で、バーベキュー・スミス氏はハッとしてデニスの方を見た。

「インスピレーションを養うようにと言った事がお分かりでしょう？あなたの潜在意識を自分のために働かせなさい。無限のナイアガラの滝を動かすのです。」

階段に足音がした。バーベキュー・スミス氏は立ち上りデニスの肩に手を置いて言った。

「もう時間がありません。またいつか。期待していますよ。世の中には一般に知られたくない個人的で神聖な事があるのです。」

「勿論、よく分かります」とデニスは言った。

第7章

クローム屋敷のベッドは、全て先祖代々のもので、明るい色の帆を巻つけた4本マストの船のように巨大だった。彫刻や象眼細工されたもの、絵の描いてあるもの、金めっきしであるものなど色々あった。クルミ材、オーク材、あるいは珍しい外国産の材木でできていた。この屋敷を建てたファーディナンド卿の時代から最後の家系となった18世紀までのあらゆる時代の流行を取り入れたものだった。いずれも壮大で豪華だった。

この中で一番上等なものを、今、アンが使っていた。ファーディナンド卿の息子のジュリアス卿が、妻の最初のお産に備えてベニスで作らせたものだった。17世紀初頭のベニス

は、これを作るのに、その贅沢ともいべき技術を費やした。ベッドの本体は大きな四角い石棺のようだった。鈴なりになったバラの花が木製の枠に高浮彫で施され、官能的なキューピッドがバラの間で戯れていた。黒い枠の土台のレリーフには金めっきがしてあり、ぴかぴか光っていた。4本の柱のような脚の回りには金色のバラが渦巻き状に絡みつき、その上のキューピッドがバラの花で飾られた天蓋を支えていた。

アンはベッドで本を読んでいた。側の小さなテーブルの上に2本のろうそくが立ててあった。その明るい光の中で、彼女の顔、むき出しになった腕と肩が薄いピンク色を帯びていた。天蓋のあちこちについている金の花びらが明るく光り、ベッドの枠におちた柔らかい光は複雑なバラの花びらの間を絶え間なく通り抜け、手足を開けたキューピッドの膨れた頬や、ひっこんだお腹そして小さくひき締まった可愛いお尻に大胆に当たっていた。

ドアを微かにノックする音がした。彼女は顔を上げ、「どうぞ」と言った。金髪の丸い子供っぽい顔が開いたドアから覗き、一層子供っぽく見える藤色のパジャマ姿が入口に現われた。

メアリーだった。「おやすみなさいを言おうと思って」と彼女はベッドの端に腰を下した。

アンは本を閉じた。「それはどうも。」

「何を読んでいるの？」と彼女は本を見た。「二流のもの？」『二流』と言った時のメアリーの調子には、かなりの侮辱が感じられた。彼女はロンドンで一流のものを好む一流の人達だけとつき合い、世の中には一流といわれるものはほとんどなく、たとえあってもそれは大抵フランスのものである事を知っていた。

「あら、私は好きだわ」とアンが言った。これ以上何も話す事はなかった。メアリーはパジャマの一番下のボタンを落ち着かない様子でいじっていた。高い枕にもたれて、アンはじっと待っていた。

「抑圧がとても怖い」とメアリーはとうとう、びっくりするくらい突然しゃべり出した。息をはいた時に話し始めたので話し終えるまでに息を吸わなければならない程だった。

「何をそんなに憂鬱になることがあるの？」

「抑圧と言ったのよ、抑鬱ではないわ。」

「ああ抑圧ね」とアンは言った。「でも何を抑圧しているの？」

メアリーは説明しなければならなかった。「性的欲望…」と彼女は教育者のように言い始めた。しかしアンが遮った。

「ええ、分かったわ。抑圧ね。」

「そう」とメアリーは言った。「私、怖い。欲望を抑えるのは危険な事なのよ。本に書いてあるような徴候が現われ始めたのよ。いつも井戸に落ちる夢を見るの。それに梯子を登っていく夢も時々見るのよ。とっても不安だわ。間違いない徴候よ。」

「それが徴候なの？」

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

「注意しておかないと色情狂になるかもしれないわ。さっさと解消しないと、こうした抑圧がどれ程危険か、あなたには分かっていないのよ。」

「怖そうね」とアンは言った。「でも、どうやってあなたを助けたらいいか分からないわ。」

「あなたに話したかっただけなのよ。」

「成程ね、お役に立ててよかったわ、メアリー。」

メアリーは咳払いをして大きく息を吸った。「私思うんだけど」と彼女は説教じみた調子で話し始めた。「20世紀の文明社会に住んでいる23才の知的な女は偏見なんか持っていないと考えてもいいんじゃないかしら。」

「そうねえ、告白するけど私少し持っているの。」

「でも抑圧についてではないんでしょう？」

「いいえ抑圧についてよ。それ程多くじゃないけど、本当よ。」

「抑圧の解消についてはどうなの？」

「ええ。」

「じゃ、基本的な仮定の話はここまでにしておいて」とメアリーが言った。真剣な表情が彼女の丸い若々しい顔に現われ、大きな青い目がきらきら輝いていた。「次に、経験を持つ事がどんなに望ましいかという問題に移るわね。知識は好ましいけど無知は好ましくないとは思わない？」

ソクラテスとその弟子の関係のように、アンは素直に同意した。

「結婚が抑圧の解消だと、二人とも納得できるわね。」

「ええ。」

「いいわ」とメアリーは言った。「そうすれば抑圧は…」

「確かに。」

「従ってたった一つの結論しかないみたいね。」

「でも、私にはあなたが言う前から分かっていたけど。」

「そうね。でも今証明されたのよ」とメアリーが言った。「物事は論理的に行わなければいけないのよ。問題は…」

「問題ってどこにあるの？あなた、自分の結論に到達したのよ——私よりはるかに論理的にね。残っているのは、それをあなたの好きな人に伝える事だわ——大胆に言えば愛している人にね。」

「そこが問題なのよ」とメアリーが叫んだ。「私には愛している人がいないのよ。」

「私なら愛する人ができるまで待つわ。」

「でも毎晩、毎晩、井戸に落ちる夢なんかもう見たくないのよ。危険だわ。」

「そうねえ、もし本当に危険なら何とかしなければいけないわね。誰かを見つけなければいけないわ。」

「でも誰を？」とメアリーは考え深そうに顔をしかめた。「知的な人、知的興味の共有できる人でなければいけないのよ。女性に対して敬意を払い、お互いの仕事や考え方について真面目に話し合える人でなければいけないわ。ぴったりの人を見つけるのは簡単じゃないわ。」

「そうね、今この屋敷には結婚していない知的な男性は3人いるわ。まず、スコーガン氏。でも正真正銘の骨董品だわ。それから、ゴンボールドとデニス。この2人に絞ってもいいんじゃないかしら。」

メアリーはうなずいた。「ええ…」と彼女は言い、それから明らかに困ったように口ごもった。

「何？」

「本当にあの2人婚約してないのかしら。もしかしたら、あなたが…」とメアリーは苦しそうに言った。

「私の事を考えているのね、メアリー」とアンは猫の微笑をしてみせた。「私に関しては、あの人達とは婚約はしていないわよ。」

「よかった」とメアリーはほっとしたように言った。「2人の内のどちらにするかが問題ね。」

「私アドバイスなんかできないわよ。あなたの好みの問題だから。」

「好み的问题じゃなくて」とメアリーは言った。「価値の問題だわ。2人の事を慎重に冷静に考えなければいけないわ。」

「自分自身の事を考えるべきよ」とアンが言った。口許と半ば閉じた目の回りには、まだ微笑みがあった。「間違っただアドバイスしたくないわ。」

「ゴンボールドの方が才能はあるわ」とメアリーは言い始めた。「でもデニスより洗練されていないわ。『洗練』という言葉には何か特別の意味があった。彼女はこの言葉を慎重に口先でシューシューという歯擦音で発音した。洗練されている人はほとんどいない。そして一流の芸術作品同様、洗練されている人というのは大抵フランス人だった。「洗練されている事が、とても大切だとは思わない？」

アンは手を上げ、「アドバイスしたくないの」と言った。「自分で決めなくては駄目よ。」

「ゴンボールド家は」とメアリーは考えながら続けた。「マルセイユの出なの。女性に対するラテン的な考えを考えると、むしろ危険だわ。でもデニスは本当に真面目なのかしら。素人的な芸術家じゃないかしら。むつかしいわ。どう思う？」

「聞いていないのよ」とアンが言った。「責任逃れしたいの。」

メアリーは溜息をついた。「そうね」と彼女は言った。「休んで考えた方がいいみたい。」

「慎重にそして冷静にね」とアンが言った。

ドアのところでメアリーは振り向いて「おやすみなさい」と言い、そう言った時、アン

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

がどうしてあんな奇妙な笑いをするのかと思った。何でもないのである。アンはよく何の意味もなく笑う事がある。多分癖だろう。「今夜は井戸に落ちる夢を見なければいいけど」と付け加えた。

「梯子の方がもっと悪いわ」とアンが言った。

メアリーはうなずいた。「そうね、梯子の方がずっと深刻ね。」

第8章

日曜日の朝食は普段より一時間遅かった。そして、大抵昼食前に顔を出すことのないプリシラが、わざわざ姿を現わした。いつもの真珠のネックレスとルビーの十字架をつけて黒のシルクの洋服に身を包んで主人役を務めた。大きな日曜朝刊が、彼女のあの髪の毛の先以外の全てを隠していた。

「サリー³⁾が打者4人を残して勝ったのよ」と食物を口一杯に入れて言った。「太陽が獅子座に入っているの。そのためだわ。」

「クリケットは面白いゲームですね」とバーベキュー・スミス氏は元気よく誰にとんでもなく言った。「そう全く、イギリス人は…」

彼の隣に坐っていたジェニーが、突然驚いて「何?」と言った。「何ですって?」

「ええ、イギリス人は」とバーベキュー・スミス氏は繰り返した。

ジェニーは、びっくりしたように彼を見て「イギリス人?ええ、勿論私、イギリス人だわ」と言った。

彼は説明を始めていた。その時、ウィンブッシュ夫人は朝刊を下に置き、四角い藤色のおしろいを塗った顔を現わした。「来世についての新しい連載記事が始まっているわ。」

「『夏の地とゲヘナ⁴⁾』という題だわ。」

「夏の地」とバーベキュー・スミス氏は目をつぶって繰り返した。「夏の地、美しい名だ。美しい——美しい。」

メアリーはデニスの横に坐っていた。一晩じっくり考えた後、デニスに決めたのだった。彼はゴンボールドより才能はないかもしれない、真面目さに少し欠けるかもしれない、しかし彼の方が安全だった。

「ここではたくさん詩を書いていらっしゃるの?」と明るく真面目に尋ねた。

「いいえ」とデニスは素っ気なく答えた。「タイプライターを持って来ていないんです。」

「タイプライターがないから、書けないとおっしゃるの?」

デニスは首を振った。朝食の時話すのは嫌いだった。それにテーブルの向こうにいるスコガン氏の話の話を聞いたかったのだ。

「…教会に関する私の計画は、とても簡単なものです」とスコガン氏は話していた。現在、英国国教会の牧師は襟を間違えて着けています。私は襟だけでなく洋服も後ろ前に

大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）

着させたいのです——上着もチョッキもズボンも靴も——そうすれば、牧師は皆、ガフスボタンやボタン、レースなどで損われない上品な姿を世間に見せる事ができます。このように洋服を強制する事は、牧師になろうとする人達にとっては障害になりますが、同時に、ロード大司教⁹⁾が主張する『神聖な美』を強調する事にもなります。

「地獄では、子供達が生きた小羊を鞭打って楽しんでいるらしいわ」とプリシラが朝刊を読みながら言った。

「ああ奥様、それは単なる象徴ですよ」とバーベキュー・スミス氏が叫んだ。「神聖な真理の象徴です。小羊というのは…」

「次に、軍隊の制服ですが」とスコーガン氏は続けた。「赤と白をやめてカーキ色にすると戦争が起きるのではないかと心配する人がいます。しかし、その新しい洋服がとても上品で、腰にぴったりとしポケットの横の腰当てが腰を強調している事を知り、ズボンと長靴の持っている可能性が分かれば安心します。軍隊軍のエレガンスを止めて、麻とレインコート¹⁰⁾の制服に統一する、そうすれば…」

「今朝、私と一緒にどなたか教会に行きませんか」とヘンリー・ウィンブッシュ氏が尋ねた。返事はなかった。

「私が聖書を読むんです。ボディウム氏もいます。彼の説教は聞く価値があります。」

「どうも、どうも」とバーベキュー・スミス氏が言った。「私としては自然の教会を崇拜したいですね。シェイクスピアは何と言っていましたかね。『本の説教・小川の石¹¹⁾』彼は窓の方向に向かって腕を振った。そして、そうしている内に、この引用はどこか間違っているのではないかと段々不安になってきた。どこかが違っている——何だろうか？説教？石？本？

第9章

ボディウム氏は、牧師館の書齋にいた。19世紀風の狭く先の尖ったゴシック式の庭からわずかばかりの光が入っていた。明るい7月の陽気だというのに部屋の中は薄暗かった。茶色のニス塗った本棚が横一列に並び、棚という棚は古本屋が通常重さいくらで売られるような、ぶ厚い神学書であふれていた。暖炉や炉棚の上の飾り、細長い脚、小さな棚は全て茶色でニスが塗ってあった。机も椅子も、そしてドアも何もかもがそうだった。床には模様入りの濃い赤茶のカーペットが敷いてあった。部屋全体が茶色で奇妙な感じだった。

この中でボディウム氏は机の前に腰かけていた。鉄の仮面をかぶったような男だった。灰色の顔と鉄のような頬骨、狭い額をしていた。厳しく不屈の皺が頬に向かって真直ぐ走り、鼻は細く繊細で鳥のくちばしみたいだった。目は茶色でその回りの皮膚は焦げたように黒っぽかった。かつては黒かった髪も、白髪になり始めていた。耳は小さく整っていた。口、顎、上唇は濃い鉄色だった。説教で調子を上げた時の声は、耳障りで、あまり使わな

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

いドアを開けた時の鉄のちょうつがい、ギシギシいうのに似ていた。

12時半を過ぎていた。説教のため声がかすれ疲れ果てて教会から帰って来たばかりだった。一生懸命、信者の心に訴えて説教した。しかし、クローム村の信者達の心は消しゴム、しかも堅い消しゴムでできていた。そのため跳ね返ってしまう。クローム村の人々はボディウム氏には慣れていて、いくら説教しても大抵、居眠りをしてしまうのだった。

その日の朝も、いつものように神について説教した。神の御手に入る事は何と恐れおおい事か、わからせようとした。彼らは神は穏やかで慈悲深いものと考えている。彼らは事実、更には聖書に目をつぶっているのだった。タイタニック号の乗客達は、船が沈む時「神の元に近づく」と唱えたのだ。その意味を理解していただろうか。正義の白い炎、怒りの炎が…。

サボナローラ⁷⁾が説教すると、人々は大声ですすり泣いたり呻いたりしたと言う。クローム村ではボディウム氏の説教中は、時々咳払いや深い息使いがあるだけで、その静けさが破られる事はなかった。一番前の席にはヘンリー・ウィンブッシュ氏が静かに上品な身なりをして坐っていた。ボディウム氏は説教壇から飛び降りて彼を揺り動かしたいと思った事もあった——信者全員を叩き殺したいと思った事も何度かあった。

彼はがっくりして机の前に坐っていた。ゴシック式の窓の外は暖かく、とても穏やかだった。何もかもいつもと同じだった。しかし、しかし…マタイ伝24章の7節の説教を始めて4年になる。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。また、あちこちに飢饉が起り地震があるであろう⁸⁾。」もう4年だ。この説教は印刷してあった。全世界の人々に、彼が言おうとしている事を知らせなければならなかった。その小さなパンフレットのコピーが机の上にあった——何度も何度も使われたために犬の歯のように先がすっかり丸くなったフォント⁹⁾でタイプされた8ページばかりの小冊子だった。広げてもう一度読み始めた。

「『民は民に、国は国に敵対し立ち上がるであろう。また、あちこちに飢饉が起り地震があるであろう。』」

「主がこれらの言葉を述べられて1900年になります。そして、戦争、飢饉、地震のなかった時はありませんでした。強大な帝国が滅亡し、疫病が地球上の半分の人々の命を奪い、大規模な地殻変動では数千という人々が、洪水、火事、竜巻で苦しめられました。この1900年の間にこういった事が何度も何度も起きました。しかしキリストは、二度と地上に現われませんでした。こういった災いは、人類の長期に渡る邪悪に対する神の怒りのしるしです。しかしキリスト再臨についての『時のしるし¹⁰⁾』ではありません。

「熱心なキリスト教信者が、先の戦争¹¹⁾を主の再臨のしるしと見るのは、数百万人という人々の命を巻き込む大戦争が起きたからとか、大飢饉がヨーロッパ全土に広がっているからとか、あらゆる種類の病気——梅毒から発疹チフスに至るまで——が、敵対する国の

間に蔓延しているからといった理由はでなく、その発生と経過が、キリスト再臨に関するキリスト教の預言と関係あるからです。

「先の戦争が、キリスト再臨を予言していると思われる点をいくつか挙げてみましょう。主は、『この御国の福音は、全ての民に対してあかしをするために、全世界に述べ伝えられるであろう。そして、それから最後が来るであろう¹²⁾』と述べられました。どの程度のキリスト教伝道が行われるか申し上げるのは少々僭越かもしれませんが、少なくとも100年に渡る布教活動でともかくも成就すると思います。確かに世界中の大勢の人々は、真の宗教を分かっていません。しかし、だからと言って福音書がローマ・カトリック教徒からズール族¹³⁾までの全ての不信心者に対して、『あかし』をするために説かれていた事実を消す事はできません。不信心者が広がっている事に対する責任は、説教する側ではなく説教される側にあります。

「ヨハネ黙示録16章には、『ユーフラテス川が干れる』と述べられていますが、これはトルコ帝国の衰退と滅亡の事を言っているのです。そしてこの世の終りが近づいているしるしです。ガリポリ¹⁴⁾の逸話では、トルコはまだ力の『角¹⁵⁾』を持っている事になっていますが、エルサレムの占領¹⁶⁾とメソポタミアの成功は、オスマン・トルコ¹⁷⁾の滅亡への第一歩です。歴史的に見ると、オスマン・トルコの衰退は、一世紀間に渡っています。そして最後の2年間は加速度が加わり、滅亡は火を見るより明らかでした。

「ユーフラテス川が干れるという言葉をもとに調べてみると、キリスト再臨と密接な関係にあるハルマゲドン¹⁸⁾の預言に到達します。もう一度申し上げます。大戦争はキリストの再来でのみ終結するのです。そしてその再来は、夜中にやって来る盗賊のように、こっそり突然予期せぬ時に訪れます。

「事実を検討してみましょう。歴史的に見ると、ヨハネの福音書にあるように、先の戦争はユーフラテス川が干れた時、あるいはトルコ帝国が衰退した後に起こりました。この事実は、先の戦争と黙示録にあるハルマゲドンとが関係ある事を、更には、キリストの再臨の日の近い事を示しています。しかし、もっとはっきりした証拠があります。

「ハルマゲドンは、龍、獣、にせ預言者の国から出て来る、かえるのような3つの汚れた霊¹⁹⁾によって引き起こされます。この3つの悪が、それぞれ何であるかわかれば、全ての疑問に光明が射します。

「龍、獣、にせ預言者は、歴史においては何であるかわかっています。人間の力を借りて働く悪魔がこの1900年間に起きた様々な宗教戦争の中で、この3つの力を利用したのです。龍は、異教のローマ・カトリック教会です。そして、この口から出て来るのは不信心の霊なのです。女性に象徴される獣は、ローマ・カトリック教会の権力であり、それが吐き出すものがローマ・カトリック教です。羊の皮を着た狼、あるいはキリストの姿をして悪魔の手先として働く、にせ預言者はイエズス会です。このにせ預言者の口から出る霊は、

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

にせの道德です。

「そこで我々は、この3つの邪悪な霊は、それぞれ、不信心、ローマ・カトリック教、そしてにせの道德であると考えます。これらの3つが先の戦争の原因ではないでしょうか。答えは明白です。

「不信心の霊は、ドイツ批評の霊です。高等批評²⁰⁾は、奇蹟、予言、靈感、そして事実として聖書を解釈する事を否定しています。ゆっくりと、しかし確実に、この80年の間に不信心の霊がドイツ人から聖書と信仰を奪っていきました。そのため、現在のドイツは不信心者の国となっています。高等批評は、このようにして戦争を可能にしました。キリスト教国の人間にとって、ドイツのように戦争をする事は絶対に不可能なのです。

「次に、ローマ・カトリックの霊に移りましょう。戦争を引き起した影響力は、それ程明白ではありませんが、不信心同様大きなものです。普仏戦争以来、ローマ・カトリックの権力はフランスでは衰え、一方ドイツでは大きくなってきました。現在フランスは反ローマ・カトリック教国であり、ドイツは強力なローマ・カトリック教の少数派です。共にローマ・カトリックであるドイツとオーストリアは、イギリス、フランス、ロシア、セルビア、ポルトガルの6つの反ローマ・カトリック教国と戦争をしています。ベルギーは勿論ローマ・カトリック教国です。そして連合²¹⁾の存在が正しい目的を妨げ、不成功の原因になった事はほとんど疑いの余地がありません。ローマ・カトリック教の霊が戦争の背景にある事は、敵対する国々の団結に見うけられます。そして、アイルランドのローマ・カトリック側の反乱は公平な人の目には終結したものと写っています。

「にせの道德の霊も、先の戦争においては以上2つの悪の霊同様大きな役割を果たしました。『紙切れ事件²²⁾』は、ドイツが非キリスト教、あるいはイエズス会の道德を支持しているよい例です。結局はドイツが世界を支配します。そしてそのためにはどんな手段も認められるのです。国際政治に適用されるのは権謀術数の原理です。

「それぞれの正体は今や明白です。黙示録に予言されているように、オスマン・トルコの権力の終わりが近づくとつれて、この3つの悪の霊が出て来て大戦争を引き起します。

『見よ、私は盗人のように来る²³⁾』という警告の言葉は、現在に対するものなのです——あなた方全世界の人々に対してのものです。この戦争はハルマゲドンの戦いにつながっています。そしてキリストの再臨でのみ終結します。

「では、主が戻られるとどうなるのでしょうか。ヨハネの黙示録にあるように、キリストの元にいるものは小羊の宴²⁴⁾に招かれ、神と戦うものは大宴会——御馳走になるのではなく反対に食べられてしまう恐ろしい宴——に招かれるのです。『というのは、また見ていると、ひとりの天使が太陽の中に立ち空を飛んでいる鳥に向かって大声で叫んだ。神の宴に集まって来い。そして王達の肉、将軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また全ての自由人と奴隷の肉、小さき者と大なる者の肉を食べろ²⁵⁾』とヨハネの黙

大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）

示録にあります。キリストに敵対するものは全て、その剣で殺され『全ての鳥が飽きるまで、その肉を食べるのです²⁶⁾。』これが神の大宴会です。

「遅かれ早かれ、主がやって来られ現在の苦しみから全世界を救って下さいます。小羊の宴ではなく神の大宴会に招かれた者に災いが起こります。その時になって彼らは、神が許しの神であると同時に怒りの神である事に気が付きますが、もう遅いのです。エリシャ²⁷⁾を侮辱した者を熊に殺させ、強情で邪悪なエジプト人を罰した神は、彼らが急いで悔い改めなければ殺してしまうでしょう。しかし恐らくはもう遅いのです。明日、キリストがそっと知らない内に我々の所にやって来ないとも限りません。もうすぐ、太陽の中に立っている天使が、神の怒りにふれた数百万人という罪深い墮落した人々の肉を食べさせようと、ワタリガラスやハゲタカを岩陰から呼び寄せるかもしれません。覚悟しておきなさい。主の再臨は間近です。皆さんが、恐怖に打ち震えるのではなく、希望を抱かれますように。

ボディアム氏は、小冊子を閉じ椅子にもたれた。この議論は論理的で注目すべきものだった。しかし——この説教を始めて4年経っている。4年だ。イギリスは平和で太陽は輝き、クローム村の人々があい変わらず無関心で厄介だ——もしこれが起きたら。自分だけに分かっている天がしるしを出しているとしたら！分からなかった。窓の下の茶色のニス塗った椅子に体をうずめ大声で叫びたかった。椅子のひじ掛けをぎゅっと握りしめ、何とか押さえようとした。拳が白っぽくなってきた。唇をかんだ。数分すると緊張感がとれてきた。自分の辛抱のなさを戒めた。

「4年間」と彼は考えた。この4年間は一体何だったのだろうか？ハルマゲドンの機が熟し、発酵するには長い時間がかかるに違いない。1914年の事件は前哨戦だったのだ。戦争が終わったという事に関しても幻覚だったのだ。シレジア²⁸⁾、アイルランド、アナトリア²⁹⁾では今なお戦争の火がくすぶり続けている。エジプトやインドの異教徒達は、大量虐殺への道を歩もうとしている。日本の中国人排斥、太平洋における日米の抗争は、東欧諸国に新たな戦争を引き起こすかもしれない。前途は明るいとはボディアム氏は考えようとした。本当のハルマゲドンはもうまもなく始まるかもしれない。そして夜の盗人のように…しかし、こう考えてもやはり惨めで不満だった。4年前は自信を持っていた。あの時は神の意図は明白だった。では今は？今は怒るのが当然だ。そして苦しんでもいた。

突然、そっと幽霊のようにボディアム夫人が足音もたてずに現われた。黒い洋服の上の顔は青白く、目はガラスに写った水のように青く、髪は真白だった。手に大きな封筒を持っていた。

「これが届いていました」と静かに言った。

封筒は開いていなかった。ボディアム氏は手で破った。一冊の小冊子が入っていた。彼のより大きく見ためも奇麗だった。「シーニー商会、牧師用装身具店、バーミンガム³⁰⁾」とあった。ひっくり返してみた。カタログは奇麗にアンティーク体³¹⁾で印刷されていた。

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

回りは赤い線で囲まれ、角はオックスフォード・コーナー³²⁾を真似て十字になっていて、小さな赤い十字架がピリオド代りに使ってあった。ボディウム氏はページをめくった。

『最高級の黒のメリノ³³⁾のスータン³⁴⁾。全サイズあり。司祭用フロックコート。9ギニーより。牧師用の洋服を専門にしているベテランによる仕立て。』

小柄な者、がっしりした者、いかにも聖職者らしい風貌の若い牧師が、それぞれ、上着、フロックコート、サープリス³⁵⁾、夜会服を着た挿絵があった。

『上祭服³⁶⁾各種。

ガードル³⁷⁾。

シーニー社特別仕立てのスタート・カソック³⁸⁾。ひもで腰のところに着けると…サープリスの下に着けると普通カソックと少しも見分けが付きません…夏、暑い季節にお薦め。』

うんざりした様に、ボディウム氏はカタログをゴミ箱に捨てた。夫人は黙って見ていた。

「村は」と夫人は静かに言った。「日に日に悪くなっているわ。」

「今度は何が起きたのかね」とボディウム氏は不安そうに尋ねた。

「お話しますわ」と椅子を引き寄せて坐った。クロームの村は、キリストの再臨があればソドムとゴモラ³⁹⁾の町のようになるかもしれない。

この章のボディウム氏の説教は1916年にホーン牧師が行った演説が骨組になっている。

第10章

デニスは踊らなかった。しかし、糖蜜と香水とベンガル花火⁴⁰⁾の中で、ラグタイム曲⁴¹⁾がピアノラ⁴²⁾から流れてくると、何かが彼の内部で動き始めた。小さな黒人の血が彼の中で大騒ぎしていた。歩くダンスホールになったようだった。病気の徴候みたいで不快だった。窓の側の椅子に腰を下ろして不機嫌そうに本を読むふりをした。

ピアノラの所では、ヘンリー・ウィンブッシュ氏が琥珀色の煙を出して煙草を喫いながら辛抱強く激しいダンス曲を聞いていた。しっかりと抱き合って踊っているゴンボールドとアンは、まるで2つの顔と4本の足をした一つの生き物のようだった。真面目で道化師のようなスコーガン氏は、メアリーと一緒にすり足でステップを踏んでいた。ジュニーはピアノの蔭に坐って大きな赤いノートに走り書きをしていた。暖炉の側のひじ掛け椅子では、プリシラとバーベキュー・スミス氏が、低次元の雑音に邪魔されず高尚な事について議論していた。

「楽天主義というのは」とバーベキュー・スミス氏は、はっきりした口調で言った。——「楽天主義というのは、光に向かう霊の出口、つまり神の方に行く発展なのです。無限との自己結合です。」

「本当に！」とプリシラは髪を振りながら溜息をついた。

「一方、悲観主義は暗闇への魂の縮小です。低次元のある一点に自己を固定してしまいます。事実や下品な肉体的現象への隷属にすぎません。」

『私を狂った男にする』という歌の歌詞が、デニスの頭の中でこだました。そうだ、ちえ、野蛮だ、しかしそれ程野蛮でもない。それが問題だった。内面は野蛮で、暴れのたうち回っている——そうだ、欲望でのたうち回っているんだ。しかし表面的には僕は、本当におとなしい、表面的には——メーメー羊のように。

アンとゴンボールドは、一匹の柔軟な生き物のように一緒に踊っていた。2つの背中を持った獣だ。デニスには本を手にして隅の方に坐って、ダンスなどしたくない、ダンスなんか嫌いだというふりをした。またメーメー羊の仕事だ。

どうして僕は別の顔に生まれなかったのだろうか？ どうして？ ゴンボールドは真鍮の顔をしている——壁が倒れるまでどんどんその壁を叩く厚かましい雄羊だ。デニスは別の顔——羊のような顔だった。

音楽が止んだ。一匹の生き物が2つになった。アンは顔を赤らめ、少し息使いを荒くしてピアノの方へやって来て、ウィンブッシュ氏の肩に手を置いた。

「今度はワルツをお願いね、ヘンリー叔父様」と彼女は言った。

「ワルツ」と彼は繰り返して、テープの入れてあるキャビネットの方に行った。古いテープを新しいのと取り換えた。一言の文句も言わない育ちのよい製粉機の所にいる奴隷のようだった。「ラン・タン・ラン・タン。」滑らかで油っぽい波の中を進んで行く船のように、メロディーが流れてきた。今までよりも、もっと優雅で調和のとれた4本足の生き物がフロアーに滑り出た。ああ何故、デニスは別の顔に生まれつかなかったのだろうか。

「何を讀んでいるの？」

彼はびっくりして顔を上げた。メアリーだった。彼女はスコーガン氏の腕から逃げて来たのだ。スコーガンは今度はジェニーをその犠牲者にしていた。

「何を讀んでいるの？」

「さあね」とデニスは正直に言った。表紙を見ると『牧畜業者のための案内書』だった。

「静かに本を讀んでいらっしゃるとは偉いわね」とメアリーは陶器のような目で彼をじっと見つめて言った。「皆どうして、ダンスを踊るのかしら、退屈なのに。」

デニスは返事をしなかった。いらいらしていた。暖炉の側のひじ掛け椅子から、プリシラの低い声が聞こえてきた。

「バーベキュー・スミスさん、お話して下さい——科学について何でも御存知なんですよ」——バーベキュー・スミス氏のとがめるような声をした。「アインシュタインの相対性理論は…星の世界をひっくり返しそうなものよ。星占いが心配で…」

メアリーは攻撃を再開した。「現代の詩人では誰が一番好き？」と聞いた。デニスは猛烈に腹がたった。どうしてこの厄介な女は、僕を一人にしておいてくれないのだろうか。

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

あのぞっとするような音楽を聞き、二人がダンスをしているのを眺めて——ああ何て、二人は優雅に踊っているのだろう——静かに惨めな状態を楽しみたいのに。メアリーはデニスを質問攻めにした。「3つある小麦の病気は何かという『サウトダイコン』に関する質問みたいだった——「現代の詩人では誰が好き？」

「ブライト、ミルデュー、スミット」と彼は簡単に答えた。

その夜デニスはなかなか寝つかれなかった。漠然とした何とも言えない惨めな気持ちで一ぱいだった。こんな気持ちになったのは、アンのせいだけではなかった。自分自身の事について、将来、人生、宇宙について情けない気持ちになっていたのだった。「青年期は、おそろしく退屈だ」と時々呟いてみた。しかしこの病気を治す方法のない事は分かっていた。

洋服を全部ベッドから払いのけ、起き上がり詩作で気を紛らわそうと思った。この言いようのない惨めな気持ちを言葉の中に閉じ込めようとした。消したり書いたりして、一時間後、9行ばかりの詩が出来上がった。

「何を望んでいるのか わからない

夏の夜が暗く静かな時

風のそよぎが

枝の中で眠りにつく時。

何をしたいのか わからない

人生も笑いも止める事はできない

時の黒い沈黙の流れを

何を望んでいるか わからない

わからない。」

大声で読んでみた。そしてゴミ箱にはおり投げ、ベッドに入った。数分して眠りについた。

〔注〕

テキストは、Aldous Huxley, *Crome Yellow* (Harmondsworth, Penguin Books, 1974) を使用。

- 1) argal: アルガリ羊。中央アジアに生息する角の曲がった大きな野生の羊。
- 2) The Things that Really matter happen in the Heart: 第2章 (大手前女子大学論集第23号、オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳①) 参照。)
- 3) Surry: クリケットのチーム名。
- 4) Gehenna: ゲヘナ。エルサレムの近くにあるヒンノムの谷。苦行、苦難の地。
- 5) Laud: William Laud (1573~1645)。英国Canterburyの大主教。
- 6) Sermons in books, stones in the running brooks: Shakespeareの*As You like It*からの引用であるが、正しくは"Sermons in stone" (石の説教) である。
- 7) Savonarola: サボナローナ (1452~98)。イタリアのドミニコ会の修道士。宗教改革を企てた

大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）

- が異端者として火刑に処せられた。
- 8) マタイ伝第7章24節：“For nation shall rise up against nation, and kingdom against kingdom; and there shall be famines, and pestilences, and earthquakes, in divers place.”
 - 9) fount：フォント。同一サイズ同一書体の欧文活字一揃い。
 - 10) signs of the times：時のしるし（マタイ伝第16章3節）。
 - 11) 第一次世界大戦を指す。
 - 12) マタイ伝第24章14節：“this Gospel of the kingdom shall be preached in all the world for a witness unto all nations；and then shall the end come.”
 - 13) Zulu：ズール族。南アフリカ共和国に住む種族。
 - 14) Gallipoli：ガリポリ。ダーダネルス海峡とエーゲ海にはさまれたヨーロッパトルコの半島。
 - 15) horn：力、神、キリストの象徴。
 - 16) Jerusalem：エルサレム。パレスチナの中心都市。1949年東エルサレムはヨルダン領に、西エルサレムはイスラエル領となった。
 - 17) Ottoman Empire：オスマン帝国、トルコ帝国。第一次世界大戦に崩壊。
 - 18) Armageddon：ハルマゲドン。世界の終末における善と悪の大決戦、あるいはその場所。（ヨハネ黙示録第16章16節）。
 - 19) ヨハネ黙示録第16章13節中の“...there unclean spirits like frogs come out of the mouth of the dragon, and come out of the mouth of the beast, and out of the mouth of the false prophet”参照。
 - 20) higher criticism：高等批評。聖書解釈の根拠や著書、著作年代などの事の確定を目的とする聖書の学問的研究。
 - 21) Allies：連合国。第一次世界大戦でドイツなどの中欧諸国に対抗した連合諸国（英国、フランス、ロシア他）。
 - 22) The Scrap of Paper Incident：紙切れ事件。1914年8月、ドイツがベルギーの中立を犯した事件で“a scrap of paper”とは、その時のドイツ外相の言葉で紙くず同様の条約という意味である。
 - 23) ヨハネ黙示録第16章15節：“Behold, I come as a thief.”
 - 24) supper of the Lamb：小羊の宴（ヨハネ黙示録第19章9節）。
 - 25) ヨハネ黙示録第16章17～18節：“I saw an angel standing in the sun; and he cried in a loud voice, saying to all the fowls that fly in the midst of heaven, Come and gather yourselves together unto the supper of the Great God; that ye may eat the flesh of kings, and the flesh of captains, and the flesh of mighty men, and the flesh of horses, and of them that sit on them, and the flesh of all men, both free and bond, both small and great.”
 - 26) ヨハネ黙示録第19章21節：“and all the fowls will be filled with their flesh.”
 - 27) Elisha：エリシャ。紀元前9世紀頃のヘブライの預言者。
 - 28) Silesia：シレジア。ヨーロッパ中部のオーデル川上流の地方。
 - 29) Anatolia：アナトリア。黒海と地中海との間の広大な高原。
 - 30) Birmingham：インクランド中部West Midlands州の都市。
 - 31) antique characters：アンティック体。筆線にコントラストの少ないやや肉太の見出し用活字書体。
 - 32) Oxford corners：隅で交叉した輪郭罫が十字になっているもの。
 - 33) merino：スペイン原産の羊メリノからとれる絹のような細かい毛の羊毛。
 - 34) soutane：スータン。聖職者の平常服。
 - 35) surplice：サープリス。聖職者が、カソックの上に着るゆったりとした袖の広いリンネル製の白い法衣。

オルダス・ハックスレー「クローム・イエロー」(翻訳②)

- 36) chasuble : 上祭服。ミサの時に司祭がアルバ (ミサの時の祭服) の上に着る袖のない長円形の衣服。
- 37) girdle : ガードル。祭服を腰のところで締める帯。
- 38) cassoch : カソック。牧師が通常着る足までの長い法衣。
- 39) Sodom and Gomorah : ソドムとゴモラ。住民の邪悪のため天上から火で神に滅ぼされた死海近くの古代の町。
- 40) Bengal light : ベンガル花火。鮮やかで持続性のある青色花火。信号、舞台に用いる。
- 41) ragtime : ラグタイム。ジャズ音楽の一種。黒人ピアニスト達によって始まったとされる syncopation をきかせたリズム。
- 42) pianola : 自動ピアノの一種。